「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies
【編】

After/Withコロナの「国際日本研究」

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

――――ヨーロッパからの報告

国際日本文化研究センター

目次

003　序文（荒木　浩）

第Ⅰ部
コロナ後の国際関係と人文学研究

015　コロナ禍と国際関係（五百旗頭　真）
037　人文学研究におけるオンライン上の研究資源――現状と課題（関野　樹）
059　**Column 1.　コロナと国際関係**（楠　綾子）

第Ⅱ部
コロナ禍と日本研究――ヨーロッパからの報告①

067　イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響（エドアルド・ジェルリーニ）
074　Covid-19（コロナ）を翻訳する（佐藤＝ロスベアグ・ナナ）
084　コロナ禍における見えるものと見えないもの（鋳物美佳）
095　面目を改める？ 新型コロナウイルスとベルギーにおける日本学の現在と将来（アンドレアス・ニーハウス）
103　「良心」を考える（マルクス・リュッターマン）
119　After/With コロナの国際日本研究――パネル発表「ヨーロッパからの報告①」を受けて（安井眞奈美）
128　**Column 2.　国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後**（山田奨治）

第Ⅲ部
コロナ禍と日本研究――ヨーロッパからの報告②

137　Pandemic and Kabuki Dramaturgy（Alan Cummings）
149　**［日本語訳］**パンデミックと歌舞伎のドラマトゥルギー（アラン・カミングズ）
159　Covid-19 and Japanese Studies: Some Thoughts from Prague（Toyosawa Nobuko）

174 **[日本語訳]**パンデミックと日本研究に関して――プラハからの発信(豊沢信子)
188 コロナ禍におけるエトヴェシュ大学の現状と試み（梅村裕子）
197 Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork（Björn-Ole Kamm）
216 **[日本語訳]** 日本におけるライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）および教育ロールプレイングの研究方法論における問題点：リモートフィールドワークの（不）可能性について（ビョーン＝オーレ・カム）
236 「ヨーロッパからの報告②」に関するコメント／ Comments on the “Reports from Europe, Part 2”（キリ・パラモア／ Kiri Paramore）
245 **Column 3.　コロナ禍の後に――大学教育・研究の転換とメタバース**（藤本憲正）

付録　「国際日本研究」コンソーシアムについて

253 設立の経緯と趣旨
254 「国際日本研究」コンソーシアム規則
256 会員機関一覧
257 会員機関紹介①　法政大学国際日本学研究所（小口雅史）
259 会員機関紹介②　総合研究大学院大学 文化科学研究科国際日本研究専攻（フレデリック・クレインス）

261 あとがき――闇のなかで“未来図”を描く（白石恵理）

264 執筆者一覧

イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響

エドアルド・ジェルリーニ

この長い一年で忘れた人も多いだろうが、コロナのパンデミックに遭遇したのは世界で、中国の次にイタリアが最も早かった。2020 年 2 月 22 日に、北イタリアの病院で初めて、新型コロナウイルスの死者が出て、1 カ月後に 7 万人以上の感染者が現れた。その頃、毎日の死者数は上昇するばかりだった。そして 3 月 9 日からのほぼ 3 カ月、イタリア人は非常に厳しいロックダウンを経験した。その緊急対策のおかげで、夏になってやっと新しい感染者数は数十人に激減したが、ご存知の通り本会議が開催された 12 月には、また感染者が急増し、いわゆる第 2 波の最中にあった。当時のニュースによると、たった 1 日で 1 万 7000 人もの新たな感染者が確認されている。死亡者も当然多い。この空前の状況により、イタリアの大学の日常は、2 月後半から混乱に陥ってしまった。私はその頃、まだ日本にいたが、ヴェネツィア・カフォスカリ大学の同僚たちから伝わった情報によると、2 月末から急に遠隔授業という新しい形式が必要不可欠になった。さすがに 1 ～ 2 週間ぐらい、授業の停止があったが、教員らも学生たちも、最初のショックを乗り越え、聞いたことのない Zoom やら Teams やらというソフトをたちまち習得し始め、すでに教材として配給されていた Moodle を使いこなした末に授業と試験を行うことになったという。大変だったはずだが、授業のやり方をあらためるには良い刺激となったかもしれない。私も聞いたことのないブレンディッド（blended）という授業法、つまり、教室での活動があって、自宅でのネットによる活動もあってという新しいやり方に、いろいろとチャレンジさせられるようになった。

前述のとおり、イタリアでのコロナウイルスによる感染状況は、夏以降少し落ち着いた。したがって、席数を減らしたり、距離を保たせたりするなどの対策を実施して、9 月からまた教室で対面授業が行われるようになった。全員の学生を受け入れることができない状況のなか、一年生を優先するという方針がほとんどの大学で決められた。その後、残念ながら、第 2 波が到来し、再度ロックダウンが始まったのである。

このような非常事態でメチャクチャになったのは、授業や学生生活だけではない。研究活動も大きな影響を受けた。たとえば、イタリア日本学会（AISTUGIA）の年次大会は、初めてオンラインで行われた。会員の中には高齢のベテラン学者がたくさんいて、このようなハイテクの形式には心配があった。しかし結局のところ、参加者が多く、成功だったと言える。逆に、いつもより参加者数は多かったようである。イタリアの各地から集まることは不便な面もあり、オンラインだと誰でも、特に身体の不自由な方がたも楽に参加できるというメリットが明らかになった。そしてまた、この非常事態のおかげで、日本と世界との新しいつながり方が生まれた。日本でのシンポジウムやワークショップに、世界中の人々が参加できるようになった。また、日本国内の歴史ある学会も、オンラインで行われるようになった。これからもしばらくは、オンラインと対面、両方の形式で行われていくのではなかろうか。そのほうが、参加者は集まりやすいからだ。私自身が経験したのは、早稲田大学の河野貴美子先生と一緒に企画した「テクスト遺産の利用と再創造―日本古典文学における所有制、作者性、真正性―」というワークショップだが、これはなんと、220 人もの参加者を集めた。アメリカや中国からの参加者も少なくなかった。オンライン形式の場合、多くの予算がなくとも海外のゲストを招聘することが可能になった。私も数カ月前、イエール大学のエドワード・ケーメンズ（Edward Kamens）先生のご招待により、イエール・ジャパン・コロキアムというプログラムで “Which future for the past? Japanese premodern literature between cultural heritage and digital humanities”（過去にはどんな未来を与えるか？ 文化遺産とデジタル人文学とのはざまの日

本前近代文学）という講演を行うことができた。ロックダウンや旅行の制限がなければ、このようなチャンスはなかったのではないかと思う。

もう一つ気づいたことがある。このような、研究者同士の新しいつながり方は、新しい所属感をもたらしたのではないかということである。私にとって、特に二つの重要な「つながり」ができた。一つは、東北大学の「文語文プロジェクト」という、オンラインのみの研究会。これは東北大学の佐藤勢紀子先生が幹事をしていらっしゃる、文語と漢文の教育、とりわけ外国人への教え方についての研究会で、大勢の実践者が参加して、大変有効で参考になっている。あと、もう一つの重要な「つながり」は、早稲田大学の河野貴美子先生のゼミである。2020 年の夏まで、早稲田大学に招聘研究員として所属し、河野先生が指導される大学院の授業に参加させていただいた。インターネットを通じて今でも毎週月曜日、少し早起きして、そのゼミに参加するのである。これはもちろん、対面授業が回復したらできなくなることだが、海外から日本の大学で行われている授業やゼミに参加できることは、大変貴重な経験である。何らかの形で、このようなつながりがアフターコロナでも続いていけばいいと思う。日本に滞在する研究者は多分気づいていないだろうが、海外にいる学生や若手研究者の立場から見ると、このようなチャンスが与えられると大きなメリットがある。まず、イタリアなどの国では研究会のために人を集めることは難しい。一つの作品を一緒にじっくり読むというメンバー自体がそもそも少なく、毎週集まることはまず無理である。日本の研究会やゼミに参加できることは、大変ありがたいことだ。

オンライン研究会には、もう一つ、メリットがある。日本語での研究会に初めて参加する留学生にとっては、今どこで何を読んでいるか、原稿や資料の何ページに当たるのかを把握するのはかなり大変だと思う。私には、そういう経験が結構ある。画面共有というシステムでは、その問題を解決できる。そしてまた、Zoom などのチャットを通じて参加者同士でリンクを交換したり、資料や参考文献を紹介し合ったりすることが容易である。今みんなが話している作品はこれだとか、どういう字で書くとか、すばやく伝えられる。

そして、その研究会の習慣や個人的なやり方にもよるが、当日ではなく、事前に発表原稿や資料を共有することも簡単であり、特に予習が必要な留学生にとってはありがたい。外国の学生の場合、その場で急に日本語の論文を出されると、すばやく目を通すことが精一杯だと思う。予習できる時間があれば、自分で頑張って先に読んで、質問もゆっくり考えることができる。これには、日本語の学習者にとってはさらに便利な効果がある。数カ月間の留学で集めたPDFは、紙媒介のレジュメよりも保存しやすく、またテクスト検索も可能である。ある意味で学術日本語の個人的なデータベースができてしまう。たとえば、この表現はいつどのように使うのかなど、論文を書くうえで大変参考になる。

しかしもちろん、この一年間には問題もたくさん起こった。まず、研究活動に携わる者にとって、家で仕事をすることは、場合によって大変不便である。メディアでも話題になったが、コロナ禍は、人々の経済的な格差を明らかにした。つまり、小さな家に住んでいる人、たとえば子どもと一緒に暮らしている人の場合、仕事がなかなか捗らない。仕事専用の部屋などがある、より大きな家に住む人であれば、そのような問題はない。さらに、最も深刻な問題は、図書館や資料館を使えないことである。個人で持っている本しか使えないと、論文を書くことは大変困難である。20世紀の半ば、エーリヒ・アウエルバッハ（Erich Auerbach, 1892–1957）という書誌学者が、ナチスドイツから逃亡して、トルコにしばらく滞在した。そこには十分な参考資料を所蔵する図書館がなく、仕方なく自分の記憶に頼るしかなかったと、代表作『ミメーシス』の序文で語っている。もちろん、アウエルバッハの時代と違って、今日ではインターネットという道具がある。一次資料や参考文献はある程度閲覧することができる。しかしなお、ネットで得られる情報と資料数は、大学図書館の資料規模に及ばないと思う。たとえば、日本文学全集が公開されていない。もちろん「ジャパンナレッジ」などの有料サービスである程度は読めるが、たとえばイタリアでは「ジャパンナレッジ」のアカウントを購入している大学はほとんどない。理由として、予算という壁もないこと

はないのだが、ヴェネツィア・カフォスカリ大学の場合は、高額な会員サービスの購入を拒否するという方針を定めている。ネットでアクセスできる有料サービスであれば、個人で登録し、支払いをすれば良いと。しかし、これもまた先ほどの問題につながる話で、研究者の活躍が各々の個人的な経済状況によって左右されてもよいのだろうか。物価が安い国では、研究者の給料も安く、日本ではさほど高額ではないと感じられるサービスが、他の国では負担できない価格になっている場合もあるだろう。個人の環境と経済状況によって、研究のクオリティーが変わらざるを得ないという現実がここにある。

もしかすると我々は、21 世紀に手に入れた可能性に富んだ新技術をちょっと無駄にしているのではないかと思うことがある。昔の習慣と考え方をそのまま変えることなく、21 世紀も研究を続けているのではないかと。具体的な例をあげよう。私が現在関わっている一つの翻訳プロジェクトがある。それは、カフォスカリ大学の同僚ピエラントニオ・ザノッティ氏と共同で 3 年ぐらいかけて行っている、石川啄木の詩集『悲しき玩具』のイタリア語訳である。最初から最後まで、直接会わずに Skype のみを通して遂行している。会わなくても、このような仕事が可能であるという時代に生きており、そのための技術がすでにある。古典文学研究の場合、たくさんの資料がますますデジタル化され、インターネットで公開され、本会議初日の関野樹教授による報告のとおり、IIIF とか、資料共有とか、自由交換、利用制限なしなどの望ましい方針が広がってきていることはうれしい。しかし、まだ問題は残っている。ある日、『悲しき玩具』の翻訳のために、明治 45 年の初版の表紙を見たいと思い、国立国会図書館のサイトを調べて、デジタル版のあることがわかった。よかった！とクリックしてみると、“Available only at the NDL” というメッセージが現れた。国会図書館内からのみ、デジタル版にアクセスできる。つまり、その画像はデータベースにはあるが、海外からは表示できないということであった。いうまでもなく、これは著作権と関わる問題だが、そもそも明治時代に出版された本には著作権がかかっていないはずであろう。私には不思議に思えた。

これは、文学作品に限ったことではない。学術論文の場合も大体同じである。日本の学術雑誌では、まだデジタル化されていない、オープンアクセスで公開されていないものは少なくない。もちろん、すべてではない。*Monumenta Nipponica* はすでに 2005 年からデジタル版でも出版され、最初の 5 年間は有料だが、そのあとは無料で閲覧・ダウンロードできるようになっている。個人的な考えに過ぎないが、すべての学術雑誌がこのような出版スタイル、あるいは最初からオープンアクセスで刊行されるべきだと思う。日文研や早稲田大学、国文研などではすでにこのような方法による研究成果の公開がある程度行われている。ところで、ここには少しおかしな点がある。私立大学は別にして、国立大学や国立研究所などで行われている研究は、基本、国からの経費で賄われている。しかしその研究成果は有料出版になる場合が少なくない。つまり、税金で支援された研究の成果が民間企業の利益になる、という矛盾である。ヨーロッパではどうだろうか。私は今、「マリーキュリー・アクション」（Marie Sklodowska-Curie Actions: MSCA）という、欧州委員会が支援するフェローシップのもとで働いている。このフェローシップの契約書には、研究成果をオープンにすることが義務づけられている。少し猶予はあるが、基本として研究期間中に執筆した論文などはすべてオープンアクセス、つまり無料でネット公開しなければならない。これははっきりとした政治的な方針であり、今後とも強化するよう期待したい。

ここで、視野を少し拡大してみよう。世界人権宣言によると、科学の進歩とその恩恵にあずかる権利を有する者は、人類全体であると定められている。すべての人間が、科学研究の成果を楽しみ、利益を享受すべきである。研究成果をオープンにすることは、このような政治的な方針、ビジョンを具現化する一手段であり、著作権というシステムと概念自体を考え直す必要に迫られていると言えるだろう。社会の共通善は今、個人的な利益を保証する著作権と衝突しているのではないか。研究成果を人類の共通善だとすれば、著作権はその共通善を規制してしまうシステムにほかならない。大学で行われる研究成果が、出版社の商品として扱われてよいのか。従来、出版社は必要不

可欠な存在だったが、インターネットの時代には、個人で本を出版するのは割と容易になった。ここでは、さまざまな出版社の編集部の方がたが一生懸命に担っている重要な役割を軽視しているわけではない。ただ、学術出版の場合には、ほかの公開のあり方、また、これまでとは異なる出版社の協力のあり方が考えられるのではないかと言いたい。全社会によって支えられている研究成果をただ一民間業者の商品にしてもよいのか、という大きな問題については引き続き考えなければならない。

では、アフターコロナにおいて、図書館、博物館、美術館などはどのように変わるべきだろう。デジタル技術をもって何をなすべきか。大学、特に国営の教育機関や研究施設の役割と、社会における位置をどうとらえ直すべきか。そしてまた、ソーシャル・ディスタンスという制限が緩和されたあと、人間と人間の関係をどのように構築し直すべきか。これらについては、より平等な社会を作るという目的を念頭に置いて、我々研究者一人ひとりに考える義務があると思われる。特に、人文学の研究に携わる人間であれば、なおさらであろう。

梅村裕子（UMEMURA Yuko）

エトヴェシュ・ロラーンド大学［ELTE］人文学部日本学科長

Japánok és magyarok egymásról. Akadémiai Kiadó, 2017.

（『日本人とハンガリー人の相互認識』アカデミア出版、2017 年）

Björn-Ole KAMM（ビョーン＝オーレ・カム）

京都大学大学院文学研究科講師

Role-Playing Games of Japan: Transcultural Dynamics and Orderings. New York: Palgrave MacMillan, 2020.

Kiri PARAMORE（キリ・パラモア）

アイルランド国立大学コーク校東アジア学部教授

Japanese Confucianism: A Cultural History. Cambridge: Cambridge University Press, 2016.

藤本憲正（FUJIMOTO Norimasa）

国際日本文化研究センター機関研究員

『ハンス・キュングと宗教間対話――人間性をめぐるその神学的軌跡』三恵社、2021 年

小口雅史（OGUCHI Masashi）

法政大学文学部教授

『儀礼・象徴・意思決定――日欧の古代・中世書字文化』（河内祥輔ほかと共編著）思文閣出版、2021 年

フレデリック・クレインス（Frederik CRYNS）

国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学国際日本研究専攻長／教授

『ウィリアム・アダムス――家康に愛された男・三浦按針』ちくま新書、2021 年

（所属・肩書は 2022 年 3 月末現在）

【編著者（「国際日本研究」コンソーシアム）】

荒木　浩（ARAKI Hiroshi）
国際日本文化研究センター教授・総合研究大学院大学教授
『『今昔物語集』の成立と対外観』（思文閣人文叢書）思文閣出版、2021 年

白石恵理（SHIRAISHI Eri）
国際日本文化研究センター助教
“Fictitious Images of the Ainu: *Ishū Retsuzō* and Its Back Story,” *Japan Review* 36 (2021), pp. 89–109.

松木裕美（MATSUGI Hiromi）
国際日本文化研究センター助教
『イサム・ノグチの空間芸術———危機の時代のデザイン』淡交社、2021 年

ゴウランガ・チャラン・プラダン（Gouranga Charan PRADHAN）
国際日本文化研究センター機関研究員
『世界文学としての方丈記』法蔵館、2022 年

After/Withコロナの「国際日本研究」——ヨーロッパからの報告
Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe
「国際日本研究」コンソーシアム記録集 2021（非売品）

2022（令和 4）年 3 月 31 日初版発行

編　集　「国際日本研究」コンソーシアム
制作協力　文学通信
発　行　国際日本文化研究センター
〒 610-1192 京都市西京区御陵大枝山町 3-2

装　幀　文学通信　岡田圭介
印刷製本　モリモト印刷

ISBN（紙）978-4-910171-08-1　（電子）978-4-910171-09-8
© 2022「国際日本研究」コンソーシアム

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

https://cgjs.jp

設立趣旨・目的

「国際日本研究」コンソーシアムは、「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げた大学の研究所や大学院課程のニーズをくみ上げつつ、連携を進めようとする我が国初の試みです。
「国際日本研究」に関わる共同研究会や国際研究集会に、コンソーシアムとして参加することによって、コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティを海外研究者ネットワークと結びつけることを目ざします。
また、コンソーシアムにおいては、学術的共同研究の推進、国際共同ワークショップの開催を通じて、「国際日本研究」の学問的基盤を構築しながら、若手研究者の育成にも努めます。研究成果等はデータベース化し国内外へ発信します。

ISBN978-4-910171-08-1

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies

After/With コロナの「国際日本研究」——ヨーロッパからの報告

「国際日本研究」コンソーシアム Consortium for Global Japanese Studies ……【編】

国際日本文化研究センター

「国際日本研究」コンソーシアム
Consortium for Global Japanese Studies
……【編】

第Ⅰ部
コロナ後の国際関係と人文学研究

コロナ禍と国際関係（五百旗頭真）
人文学研究におけるオンライン上の研究資源—現状と課題（関野樹）
Column 1. コロナと国際関係（楠綾子）

第Ⅱ部
コロナ禍と日本研究—ヨーロッパからの報告①

イタリアから見たコロナ禍と日本研究への影響（エドアルド・ジェルリーニ）
Covid-19（コロナ）を翻訳する（佐藤＝ロスベアグ・ナナ）
コロナ禍における見えるものと見えないもの（鋳物美佳）
面目を改める？　新型コロナウイルスとベルギーにおける日本学の現在と将来（アンドレアス・ニーハウス）
「良心」を考える（マルクス・リュッターマン）
After/Withコロナの国際日本研究—パネル発表「ヨーロッパからの報告①」を受けて（安井眞奈美）
Column 2. 国立国会図書館デジタル化資料等の海外送信・その後（山田奨治）

After/With コロナの「国際日本研究」

——ヨーロッパからの報告

Global Japanese Studies after/with COVID-19: Reports from Europe

未曾有のこの世界的な
パンデミックの事実と体験が
いかに変化して浸透し
時を駆け抜けていったか

第Ⅲ部
コロナ禍と日本研究—ヨーロッパからの報告②

Pandemic and Kabuki Dramaturgy（Alan Cummings）
［日本語訳］パンデミックと歌舞伎のドラマトゥルギー（アラン・カミングズ）
Covid-19 and Japanese Studies: Some Thoughts from Prague（Toyosawa Nobuko）
［日本語訳］パンデミックと日本研究に関して—プラハからの発信（豊沢信子）
コロナ禍におけるエトヴェシュ大学の現状と試み（梅村裕子）
Methodological Concerns of Researching Larp and Educational Roleplay in Japan: The (Im) Possibilities of Remote Fieldwork（Björn-Ole Kamm）
［日本語訳］日本におけるライブ・アクション・ロールプレイ（LARP）および教育ロールプレイングの研究方法論における問題点：リモートフィールドワークの（不）可能性について（ビョーン＝オーレ・カム）
「ヨーロッパからの報告②」に関するコメント／Comments on the "Reports from Europe, Part 2"（キリ・パラモア／Kiri Paramore）
Column 3. コロナ禍の後に—大学教育・研究の転換とメタバース（藤本憲正）

国際日本文化研究センター

荒木 浩「序文」より

2020 年 12 月 11 日－13 日の 3 日間、国際日本文化研究センターを舞台にオンラインを結び、「国際日本研究」コンソーシアム主催の「ヨーロッパ日本研究学術交流会議—緊急会議　After/With コロナの「国際日本研究」の展開とコンソーシアムの意義」が開催された。この報告集は、その記録であり、同コンソーシアム刊行の第 5 論集にあたる。

＊

開催された年時とタイトルから明らかなように、コロナ禍 1 年目の真っ最中に企画された、緊急会議である。私が本コンソーシアム委員会（日文研）の委員長を引き受けた 2020 年度初頭の状況は、3 月以降、COVID-19 という初耳のパンデミックが日本でも深刻となって、多くの国際会議が中止・延期となり、また海外渡航そのものが中断を余儀なくされていく、現在進行形の暗転のただ中にあった。

＊

「ヨーロッパ日本研究学術交流会議」は、その暗中模索の時期に、コンソーシアム委員会のメンバーで衆知を集めて人選し、企画・立案した。そのおかげか、幸い、今日の目で見ると、いまだ終熄が見えない足かけ 3 年間のコロナ禍を俯瞰するグローバルな記録であり、また未来へ向けての論集となった、という自負もある。